いのち支えて

県内緩和ケアの現場から

□□□4

大半が周囲の勧めで

依然消えぬ負のイメージ

消極的選択

すみか
居場所求めて

三条市の会社員佐藤芳則さん(五三)は昨年、妻の三津さんと新潟市のホスピスで暮らした。

子宮がんになった三津さんは、同市の病院で手術や抗がん剤治療を受けたが、間もなく自力で歩けなくなった。昏睡状態に陥った三津さんを連れ、佐藤さんはホスピスに移った。同時に、長期休暇を取り、意識を取り戻した三津さんと同室で寝起きする生活を始めた。

三津さんは調子の良い時には食べ物を取り、入浴や看護師とのおしゃべりを楽しんだ。不安そうにしている夜は二人で手をつないで寝た。入院から三カ月後、夫と子どもに見守られ、眠るように息を引き取った。四十八歳だった。

生前「来て良かった」とホスピスの感想を漏らしていた三津さんだが、見学では「まだ入りたくない」と拒んだことがあった。ホスピスで暮らせば、積極的な延命策の抗がん剤治療を受けることはできない。まだ若い三津さんには相当な覚悟を要した。

佐藤さんは「ホスピスに入れたことは後悔していない。普通の病院にいたら手に入らない濃密な時間を過ごせた」と今、振り返る。

□■　■□

ホスピス・緩和ケア病棟は県内に九十五床ある。がん死亡者の4%が利用している計算だ(二〇〇六年)。しかし、まだ存在さえ知らない人が多く、実態を知るのは現役患者や遺族周辺にとどまっている。

五泉市の緩和ケア施設郷和の桜井金三医師(五九)は「下調べをして自分の意思で入院するのは一、二割」と説明。大多数が主治医や家族に強く勧められた末の〝消極的選択〟だとみている。

新潟市中央区の飲食店経営吉野雅則さん(四八)の父=当時(七一)=もその一人。吉野さんには本などを通して予備知識があったが、「父は〝姥捨山〟だと思っていたし、親族も入院に反対した。押し切る形でホスピスに転院させた」と打ち明ける。

父は直腸がんが再発し、足のしびれなどの不快な症状に悩まされていた。その症状はホスピスに入ると消え、食欲が出て酒をたしなむほどになった。四カ月後に亡くなったが、吉野さんは「親族も本人の暮らしぶりを間近で見て、こういう選択もあると納得していたようだ」と話す。

□■　■□

ホスピスや緩和ケア病棟には、依然として「黙って死に行く場」という負のイメージがつきまとう。「ホスピスに行くよう勧められるのは、二度目のがん宣告と同じだ」(新潟市西区在住の七十代前立腺がん患者)と受け止める患者も多い。

終末期ケアに詳しい新潟青陵大看護学科の佐々木祐子講師(三九)は「緩和ケア病棟が少なく、身近でないのも一因」と指摘、「家族の通いやすさや本人の一時帰宅も考え、本来は家の近くにあればいい」と話す。だが、同病棟は病院改築の節目に整備されることが多く、県内全域で一挙に増える状況にはない。

まずは知ってもらうこと―。郷和は今年、近隣住民向けの緩和ケア講座を始めた。桜井医師は「下越地域の病棟同士でまず手を携え、合同で啓発していきたい」と話している。

広いダイニングはイベント会場に早変わりする。9月は大学生の聖歌隊が訪れ、包み込むような歌声で患者や家族の心を癒やしていた=新潟市南区の白根大通ホスピス

ご意見、ご感想を募集しています。住所、氏名、年齢、職業、電話番号を明記し、〒950－1189 新潟日報学芸部「すみか」取材班まで。ファクスは、025（378）9539、メールは、gakugei@niigata－nippo.co.jpへ。紙面などで紹介する場合があります。